

しも いで よし お

下出義雄

裸の心を持つ人

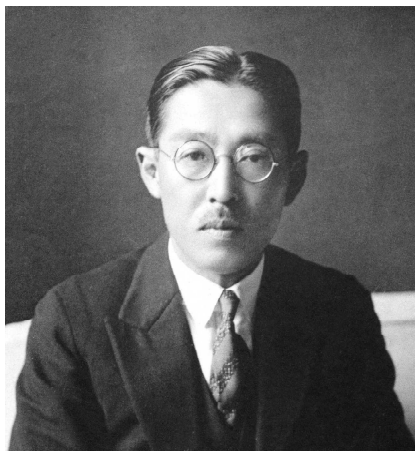
— 実業界と教育界に新しい風を吹き込む —

■ 生い立ち

下出義雄は、下出民義の長男として1890(明治23)年大阪市に生まれた。愛知県立第一中学校へ入学、その後、神戸高等商業学校へ進み、卒業後の1913(大正2)年には東京高等商業学校(東京高商、現一橋大学)へ進学した。1915年7月、下出義雄、26歳のとき、東京高商の貿易科専攻を卒業した。東京高商では教授の福田徳三から研究室に残って学者になるよう誘われたという。

■ 実業界での活躍

下出義雄は、卒業後の1915(大正4)年に東京海上保険に入り、社長各務謙吉の秘書として2年間勤務したのち、1917年9月の木曾川電力支配人を皮切りに、大同電気製鋼所取締役に就任した。下出は、1918年には、父下出民義が創業した東海電極に入社、1919年に矢作水力、1922年に豊国セメントなど次々と企業経営に進出している。その後も、下出は実業界ばかりでなく、教育界、政界で活躍を続けた。下出が関わった事業は、企業関係45社におよび、教育関係では東邦商業学校、金城商業学校、大同工業学校の設立、運営に関わった。公職



下出義雄 (1890 ~ 1958)
写真：学校法人東邦学園提供

関係では、衆議院議員、名古屋商工会議所副会頭、名古屋株式取引所理事長などに就任している。下出は、名古屋の実業界、教育界、政財界で重要な役割を果たした人物であった。

1920年、下出義雄は戦後恐慌で苦境に陥っていた近藤繁八経営の名古屋紡績株式会社の整理を引き受け、同年10月専務取締役就任した。同社の経営は初め順調であったが、最終的には下出の手には負えず失敗に終わった。

■ 下出義雄の教育事業と政界進出

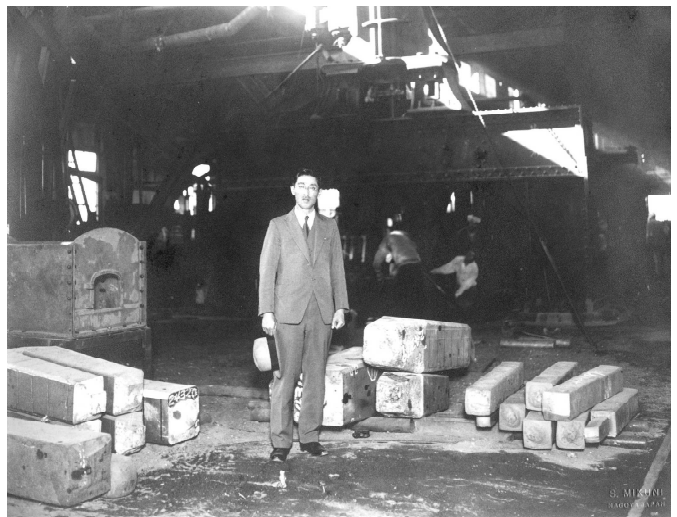
名古屋紡績での失敗後、下出義雄は東邦商業学校(現、東邦高等学校)の経営に傾倒する。東邦商業は父下出民義が関西電気(旧名古屋電灯、後の東邦電力)副社長退任時の退職金を学校設立基金とし、自ら設立者および校主となって1923年4月に開校した学校である。初代校長には元名古屋市長大喜多寅之助で、下出義雄は豊田利三郎とともに同校理事となった。

下出義雄は、1938年、大同電気製鋼所を大同製鋼株式会社に社名を変更した。この時、下出は社内外の技術者育成を目的とする工業学校の設立を決意、1938年10月、株主総会にて会社から学校への寄付に関して承認を受けた上で1939年1月、下出自身を理事長とする「財団法人大同工業教育財団」を組織、同年4月に大同工業学校(現大同大学大同高等学校)を開校した。

1942年4月に行われた第21回衆議院議員総選挙に当選し、政界進出を果たした。終戦後、公職追放が実施されるにあたって、大同製鋼、東海電極など実業界ばかりでなく、東邦商業(現東邦高等学校)や大同工業学校(現大同大学大同高等学校)などの教育界の職をからも辞し、名古屋証券取引所理事長を除いてほとんどの職を辞任した。1958年1月20日、下出義雄は名古屋市の自宅にて病氣療養中に肺炎を併発し死去した。

■ 実業界出発の原点・下出書店

下出書店は、下出義雄の実業界デビューともなった出版社である。所在地は東京であったが、初めての出版物は、1921(大正10)年4月10日発刊の武者小路実篤著『友情』であり、1921年から1923年までのわずか2年の間に、56冊の出版をした。下出義雄は、大学卒業後は研究者として学問を続けることを望んでいたが、父下出民義は、長男である下出義雄に自分が手掛けてきた事業を継承して欲しいと願っていた。この下出書店も残念ながら1923年9月の関東大震災のときに火災にあい、出版物と拠点の焼失により廃業へと向かうことになった。このときの経験が、名古屋に戻ったあと、教育界、実業界での活躍の原動力となった。



大同電気製鋼所の下出義雄

写真：学校法人東邦学園提供